

直七大学 三田老人物語 第五回

2021. 2. 8 担当福岡智哉

【講義の進め方】

- ◎『信者めぐり』所収の逸話を読みながら、ビブリオセラピー方式で進めます
- ◎皆で同じ文章を読み、その感想を心にうかんだことをそのままに書いてもらいます。
- ◎それを参加者全員で共有します。ズームのチャット機能を使って福岡宛てに送ってください。感想を名前を伏せて紹介します。匿名にする必要がない方は全員共有でながしていただけたら有難いです。
- ◎一方的な講義形式ではなく、相互共有しながら味わいを深める事を目的とします。皆さまのお力が頼りです！！
- ◎基本的に感想に注釈を入れるような事はしません。また途中で解説をしたり質問に答えることはなるべく避けます。質問のようなご感想も、その方の味わいとしていったん、そのまま受け止めさせていただきます（解説をしたり、質問に答えすぎる事で感想を誘導する事を避けたいので）言葉の意味が日本語としてわからない場合は言ってください。また、わからない事は後でまとめてご質問下さい。次回までにお答えさせていただきます
- ◎最後15分から20分は質疑応答の時間を作ります。その時に質問があ

ればどうぞ。

【狙い】

◎他力の念仏に魅せられた方々が実際におられたことを味わう

◎その方々の上にはたらきたもう阿弥陀如来を味わい、私の上にもそのはたらきが届いていることを味わう

◎三河 和兵衛同行続き まだまだ聞きたいことがたくさん編

◆「わかったようでわからないのが<たのむ一念>です。<たのむ一念>について少し教えてください。

「そうそう、それは凡夫ではわからない事じゃ。蓮如様でもわからんとおっしゃられておる。蓮如様ほどの方が、なぜわからないとおっしゃるのか、それは相承のままを伝えておられるのじゃ。だから<蓮如の曰く>として<たのむ一念>のご解釈はない。「南無といふは帰命」とか「南無とたのめば」と教えのままを伝えられておる。弥陀の仕事で弥陀の与えることが、凡夫でわかるものか仰せられたとある。ゆえに<たのむ一念>がわかったら往生は定まらない。聞いても聞いてもわからなければわからないほど、いよいよ往生間違いなしと聞くのじゃ。

というようなお示しを聞き、実に嬉しかった。彼是しているうちに時間もたってしまい、病態に障ってはいけないとお別れを告げた。政四郎さんと帰路についた道すがら、今晚のご縁は良かった、

良かった。と喜び勇んで帰った



夜が明けると、文久三年一月一日であった。

「昨晚はあまりに良いご縁だったので、お礼かたがた、もう一度お伺いしたいものですが、政四郎さん、あなたはいかがなさいますか？」とお尋ねした

「私も参りますが、今日は元旦なので、お宮参りもしなければいけない、ほかにも伺わなければいけない所があるので用事を済ませてから参りますので、お先に行っておいてください」という事で元日は一人で伺った

「昨晚は大変ありがとうございました」とお礼申し上げたら、和兵衛様はさもうれしげに

「昨夜の同行か。よう来てくれた、待ちかねておったのじゃ。後から話を聞いたところ、昨夕一度内へ来てくれたそうだが、若いものはあなたを外に追いやったと聞いた。実にすまん事をした。

どうか娑婆じゃと思って堪忍しておくれ」と申された

わたしはびっくりして「何をおっしゃっておられるのですか、もったいない事を。誠に良い所へお世話して下さいありがとうございますございました」

「いやいや、どうも法徳を知らぬ者共でしかたがない、どうかこらえておくれ・・・・・・・・」

また声を改めてさもご機嫌よろしく「昨晚不思議な事があっての」とおっしゃった。

それを聞いた私は、篤信者の事であるから、なにか不思議な事がおこったか、と思い

「その不思議な事とはどんなことですか!？」とワクワクしながら尋ねてみたら

「いや、他でもない。うちの若い者どもは、二人とももらい合わせて今日まで三十余年、親子となり一緒に暮らしておりますが、どうも仏法に気がないので残念に思っておったが、おまえさんが訪ねてきたことによって、ゆうべ二人が枕元へ来てな、あの若い方でさえ遠いこの三河まで訪ねてこられたのに、私どもは三十余年来一緒に暮らさせてもらいながら、一遍もお礼を申し上げた事もない。今あなたが往生されたら一生聞かずじまいで死んで行かにゃならんと思えば、実に悲しくてなりません。どうか一言聞かせて下さい。と言ってくれた。それを聞き、あー、またこの家にも仏法が残ったかと思ったら嬉しくてのー」と涙と共に、ウフンウフンと泣きながらのお話であった。

その物語を聞きながら、「誰でもそのぐらいの事は言うものがあるだろうに・・」とちょっと興ざめしてしまいましたが、またお話

を続けられます。

「この〈どうぞご一言〉という事は、地獄這い出しの素凡夫のままでは言われん事じゃろう、七地の菩薩の位を許されないと言われん事じゃろうな」とこの場へ出てくるまでもが私の力ではなく、まるまる仏力の法徳一つにあると教えていただき、仏法については凡夫風情の我の塵ばかりも加えられていない、お救いを明らかにお示し下さった。

◆「私のご法話を聞いている時は満足しますが、その場を離れてしまうと満足感の跡形もありません。これでは往生いかがかと案じられるのですが・・・」

和兵衛様は『御和讃』に「染香人のその身には、香氣あるが如くなり」と仰せられて、香の匂うがごとく、聞く時こそ嬉しいが、その場を離れれば何を探してもありはしない。なければこそいよいよお誓通りの法徳を知らせてもらうのじゃ」

(おまけ)

求道に用事無し

求道の先にいる仏様を想定してはならない。

求道をした先に何か得るものがあれば、自分を誇るようになる。

お礼を言わない人格になる。

浄土真宗は他力のお救い＝自力心はひとかけらも差し挟まらない
(自力無功) ⇨私のする宗教的行為はお礼である。

自力とは？

「自力といふは、わが身をたのみ、わがころをたのむ、わが力
をはげみ、わがさまさまの善根をたのむ人なり」(『一念多念文意』
p 688)

⇨私のやったことが、往生成仏の足しになると思う心
＝南無阿弥陀仏では不足。心もとないと思う心。

自力心を「疑蓋」と表現される

他力の信は疑いの蓋がない。

疑蓋無雑⇨疑いのふた（自力の信心）をまじえない＝他力の信心
「三心すでに疑蓋雑はることなし、ゆゑに真実の一心なり」(『信
卷』 p 245)

どうやったらその蓋が取れるのか??が問題

求道したら??聞いたら??称えたら??